

第12章 日本と各国との比較

I 日・米比較

日本大学大学院グローバル・ビジネス研究科教授 塚田 典子

1. 分析の視点

ここでは、基本属性以外の高齢者の生活に関する様々な調査結果の日米比較を主に紹介するが、いくつかの時系列の変化が顕著なものについても解説を加えた。また、性、年齢層、および一人暮らしかどうか等とのクロス分析によって、日本と米国の特徴や差が大きく認められたものも合わせて解説した。なお、今回調査（2010年）の分析対象となったケース数は、日本が1,183ケース、米国は1,000ケースであった。

2. 家庭生活

(1) 主な家事の従事状況(Q1b)

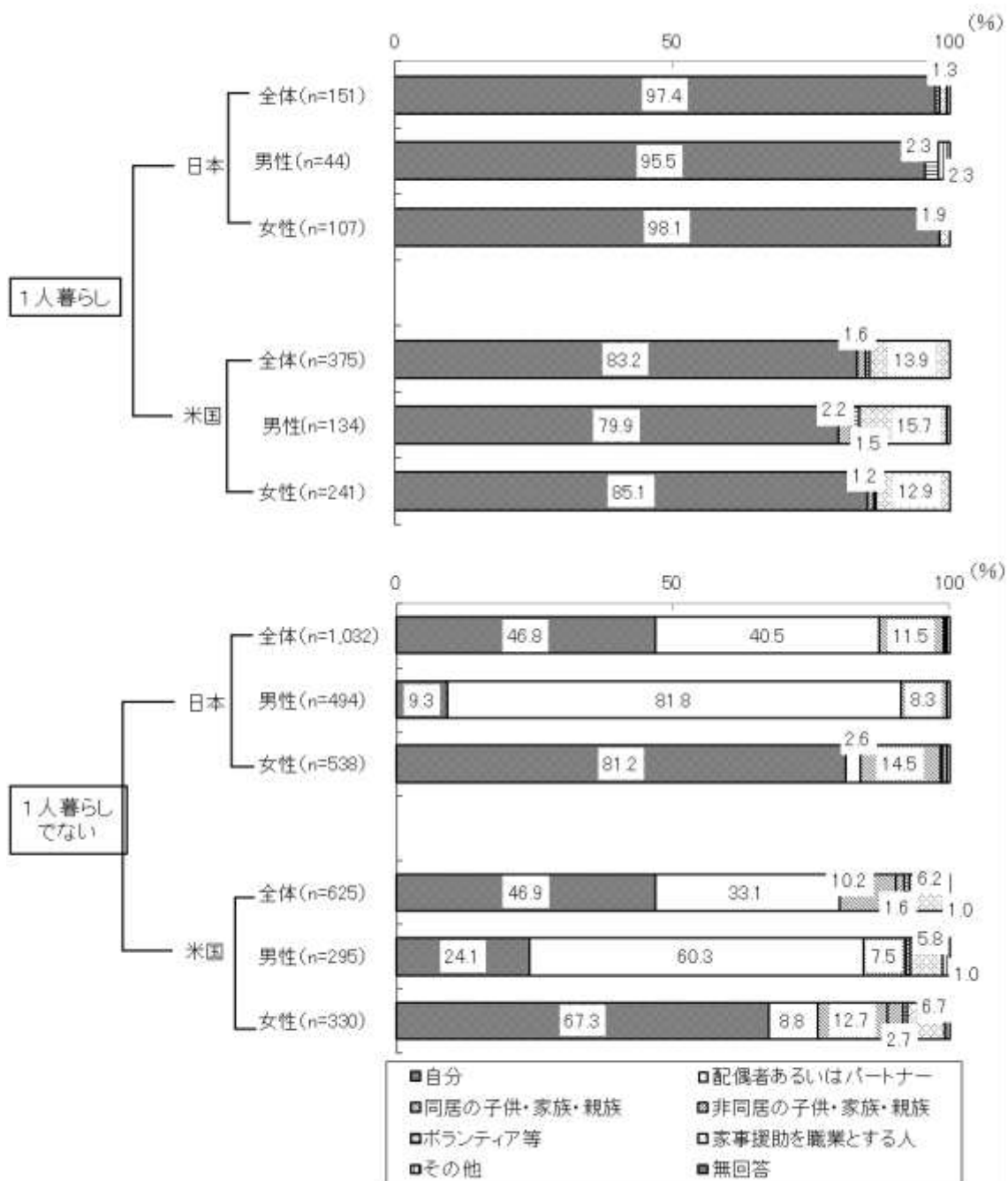
図12-1は、「炊事、洗濯、掃除等の家事を主に行っている人」を一人暮らしと一人暮らしでない高齢者のグループに分けて、全体および男女別に示したものである。なお、一人暮らしの高齢者グループは、F4の質問で「10：一緒に暮らしている人はいない」と回答した人とした。

まず、一人暮らしの高齢者について全体のデータでみると、日本も米国も、「自分が（家事を）している」と回答した割合は、日本は97.4%、米国は83.2%で日本ではほとんどの一人暮らしの高齢者が自分で家事を行っていることがわかったが、米国の方が日本に比べてその割合は14.2ポイント低かった。また、自分が主に家事をしていない、残りの回答者では誰が家事をしているのかについては、国別に差が出ており、米国は男女とも、日本に比べて「家事援助を職業とする人」の割合が多かった（男性15.7%で女性は12.9%）。

次に、一人暮らしでない高齢者についてみると、全体のデータでは、日米間の差は大きく見られなかったが、性差はみられた。日本と米国のどちらとも、女性は「主に自分が家事をしている」という回答が一番多く（日本は81.2%で米国は67.3%）、次も「同居の子供・家族・親族」が多く日本は14.5%、米国は12.7%であった。しかし、男性の回答には

日米間の差が大きく見られ、日本では8割以上の一人暮らしでない男性が「配偶者あるいはパートナー」と答え、この日本の回答は米国の回答を21.5ポイント上回った。また、米国の男性の方が、「自分が主に家事をしている」と回答した割合（24.1%）が多く、日本（9.3%）の2.5倍以上あった。この傾向は、5年前と同様に、まだまだ「男は仕事、女は家事」という日本の文化的背景が根強く残っていることを映し出しているといえる。

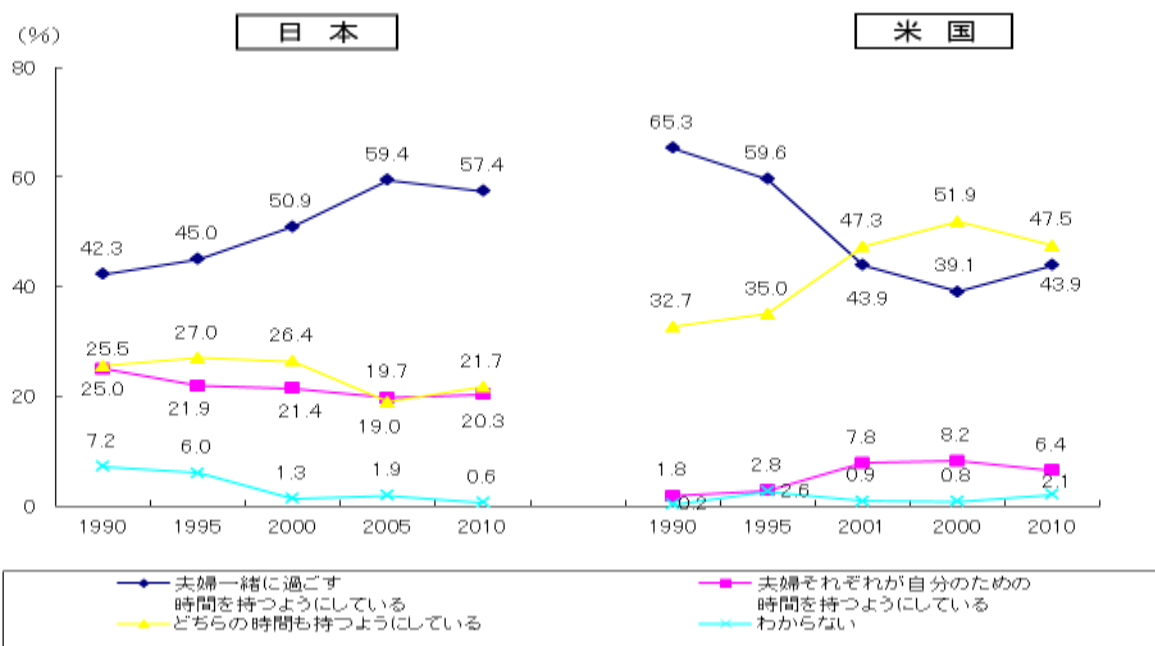
図 12-1 一人暮らし/一人暮らしでない高齢者の主な家事の従事者（2010年）



(2) 夫婦の時間の過ごし方 (Q2)

図 12-2 は、夫婦の時間の過ごし方について単一回答で尋ねた結果を、第 3 回調査 (1990 年) から時系列で示したものである。日本は、「夫婦一緒に過ごす時間を持つようにしている」高齢者がやや増加傾向であるのに対し、米国はその項目がやや減少傾向にあるのが特徴である。また、日本は「夫婦それぞれが自分のための時間を持つようにしている」という高齢者の割合が、一貫して 20% 前後であるが、米国は過去 20 年の間 10% 以下である。逆に、米国は「どちらの時間も (夫婦一緒に過ごす時間と夫婦それぞれが自分の時間を持つこと) も持つようにしている」高齢者の割合が増加傾向で、今回調査 (2010 年) では 5 割をやや下回ったものの、日本の回答より 25.8 ポイント高かった。

図 12-2 夫婦の時間の過ごし方 (時系列)



(3) 家族や親族の中での高齢者の役割 (Q3)

図 12-3 は、家族や親族の中での回答者の役割について複数回答で答えてもらったものを、性別に示したものである。まず、男性高齢者についてみると、「家計の支え手である」と「特に役割はない」の項目以外全て、米国高齢者の回答が多かった。日本の男性で一番回答が多かった役割は、「家計の支え手である」(50.7%) で、次に「家族や親族関係の中の長」(39.0%)、「家族・親族の相談相手」(35.5%) と続いたが、米国は「家事を担っている」(64.8%)、「家族や親族関係の中の長」(55.5%)、「家族・親族の相談相手」(53.8%)

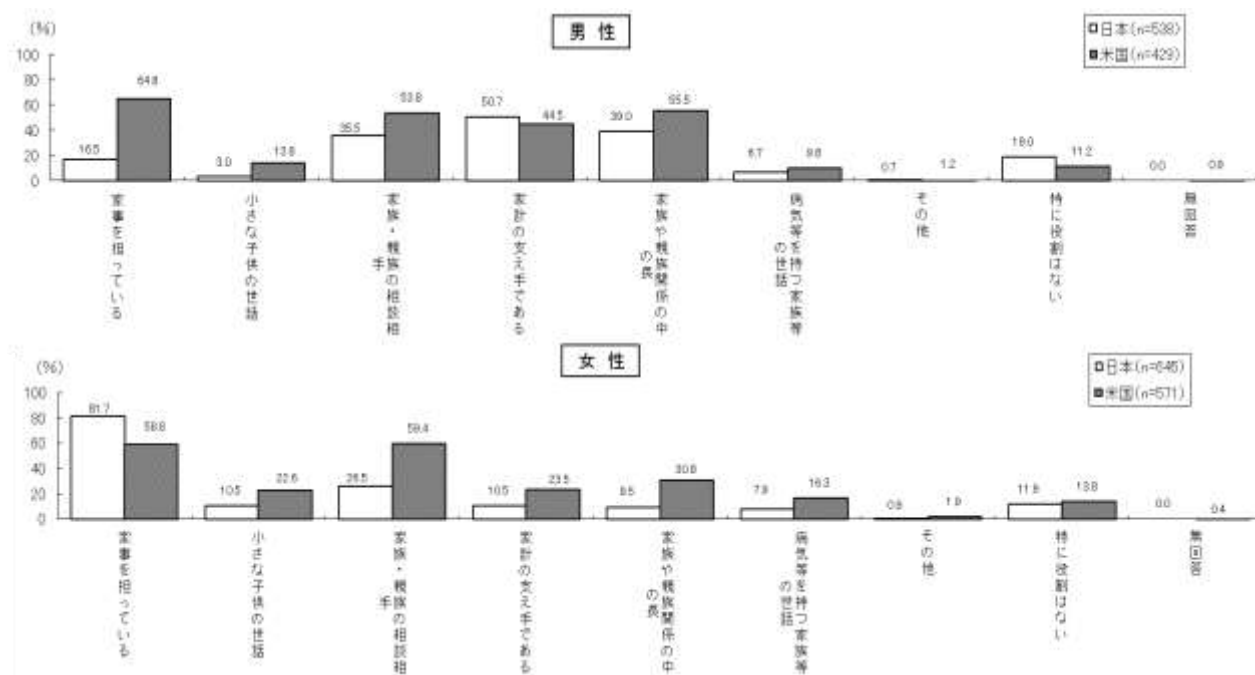
と続き、日本で最多の回答項目であった「家計の支え手」は米国では4番目に挙げた。

図 12-1 の主な家事従事者のところでも見たように、男性では、「家事手伝いを担っている」という役割の回答に日本と米国の差が最も大きくみられ、米国の男性高齢者の6割以上が「家事手伝いを担っている」と答え、この項目における日本との差が最も大きかった(48.3ポイント)。

次に、女性高齢者についてみると、日本・米国ともに、「家事を担っている」の回答が多かったが、日本が81.7%であったのに対し、米国では58.8%に留まった。また、日本と米国の差は、「家族・親族の相談相手」でも見られ、米国の女性の6割近くが家族や親族の相談相手の役割を担っていることがわかった。また、女性の「家事」の役割を除いた全役割項目において、米国の高齢者の方が、役割を持っていると回答した人の割合が多く、日本の女性高齢者は、男性同様、家庭の中での役割が少ないことがうかがえる。

ここで、日本には、「特に役割はない」と回答している男性高齢者が2割近くも存在することは注意に値する。中高年者の自殺率は、女性よりも男性に多いことから、高齢期のQOLを高めるという観点からも、日本の男性高齢者は「家計を支える」以外の役割を見つけていくことが望まれる。なお、ここでみられた日本と米国の男性の役割の差は、第6回調査(2005年)とほぼ同じ傾向であった。

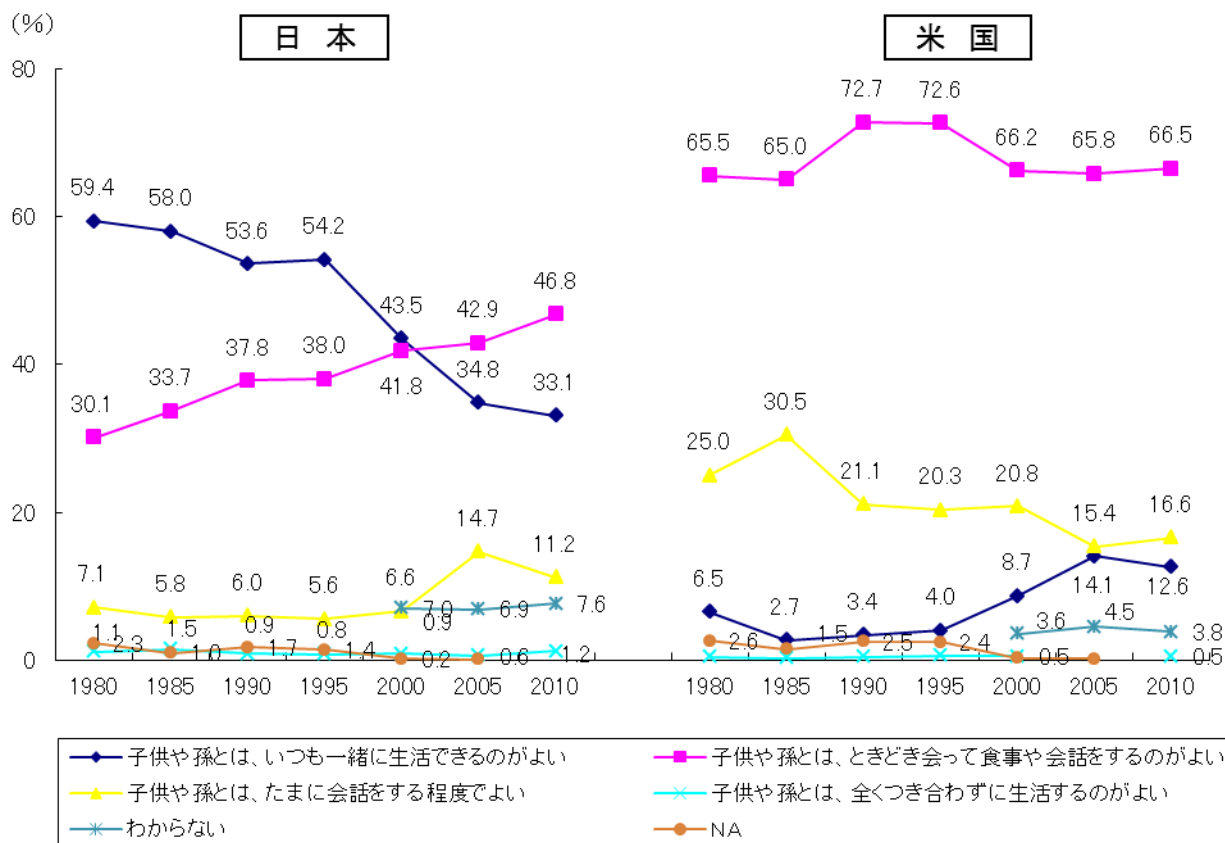
図 12-3 高齢者の役割(複数回答)(2010年)



(4) 子供や孫との付き合い方 (Q5)

図 12-4 は、高齢者の子供や孫との付き合い方についての回答の時系列変化を示したものである。

図 12-4 子供や孫との付き合い方 (時系列) (2010 年)



日本では、第1回調査(1980年)以来、「子供や孫とはいつも一緒に生活できるのがよい」という回答が減少し、逆に、「子供や孫とは、ときどき会って食事や会話をするのがよい」という回答が増えてきている。しかし、米国では、一貫して、「子供や孫とは、ときどき会って食事や会話をするのがよい」が65%から75%の間に位置し、子供や孫との付き合い方に対する意識に大きな日本と米国の差が見られる。日本では、親子の同居率が米国に比べて大きいことも関係しているであろうが、「子供は子供、親は親」の子供を独立した人間として扱い、また、どちらかというとも夫婦中心の生活をしてきた米国の特徴がよく表れていると考えられる。今後は、この子供や孫との付き合い方に対する意識と、子供への遺産分与に対する意識や介護を「期待する人」との関係を検討していくと面白いであろう。